

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第978号 平成27年8月10日

戦後70年（2）

我が国は、先進国の中ではこの70年間、何処の国とも干戈を交えなかった唯一の国です。それは、日本がアメリカの巨大な軍事力の笠の下に身を潜める事が出来た事や、中国や韓国の経済力や軍事力が脆弱であったという幾つかの僥倖に恵まれていた結果ではありますが、同時に、再び戦争はしないという国民の強い意志が働いていた事も否定は出来ません。

しかし、今や中国は、経済的にも軍事的にも超大国となり、その膨張する圧力によって周辺諸国と軋轢を起しています。それは、日本にとっても同様で、尖閣諸島を巡り緊張感が高まっていますし、竹島や北方領土を巡っても、韓国やロシアとの間の溝は深まりつつあります。こうした諸情勢の中で、日本が今後、如何に自国の安全と平和を維持して行こうとするのか、多くの国が日本の動向に注目しています。

最近、「消極的平和主義」とか「積極的平和主義」という言葉がよく使われますが、私は「平和主義」に消極的も積極的もなかろうと思っています。何故なら、他国との衝突を緩和し、最悪の事態（武力衝突）を避ける事は、戦争は絶対にしないという積極的な意志なくしては不可能だと思うからです。

相手が拳銃を持っている時に、こちらが全くの丸腰では身の安全は確保出来ない、というのは至極当然の事です。だから、防弾チョッキを着用する等、必要な対策は講ずべきですが、一番大事な事は、相手に拳銃のトリガーを引かせない事、そのような局面を作らないために日本として如何にイニシアティブを取るかという事であり、その点において積極的な姿勢が求められていると思います。そのためには、日本を含めた国際関係をどう作るかという、大きくて骨太な構想力、インテリジェンス、そして、構想を具現化するためのパワーと戦略、更には、細心で粘着力のある交渉力が必要となります。

これらはいずれも、日本人にとって苦手とするところではないかと感じていますが、取り敢えず、自分の国だけが戦争に巻き込まれず、平和であれば良いというような発想は捨てるべきでしょう。

単に戦争のない状態を「消極的平和主義」というなら、今日、我が国が世界の国々との関わりの中で生きている以上、国際関係抜きにして自国の平和だけを希求する「消極的平和主義」の立場を貫く事は不可能だといわざるを得ません。

20世紀の戦争は、国と国が国民を総動員し、国力の全てを使って戦われ、大量殺りくが繰り返されました。しかし、今や戦争は国や民族、宗教の枠組みを超え、宣戦布告もなく、地球上の様々なところで繰り広げられており、敵と味方、戦闘員と非戦闘員が混在する混沌とした状況が作り出されています。

その背景には、紛争地の多くが貧困や差別、抑圧といった様々な問題を抱えているという現状があり、それが、アメリカを中心とする欧米諸国が作り上げて来た世界秩序への反発と破壊に向かっていているように感じます。

我が国は国際社会の一員である以上、こうした国際情勢と無縁であるはずはなく、今後も我が国の平和を維持して行くためには、国際社会が抱えている貧困や差別等様々な問題の解決に、如何に積極的に貢献して行くかが問われるのだと思っています。

それはまた、国民自身も、もっと国際社会との関わりに目を向けるべきであり、少なくとも、「自分さえ良ければ」という内向き志向からは脱却する必要があるでしょう。

そのためにも、私達は改めて「われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思う。」とし「いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならない」と謳った憲法の前文を想起すべきではないでしょうか。

(塾頭 吉田洋一)